

都市計画という分野におけるコラボレーション

ゴンダール市における実践的なかかわり

設 楽 知 弘

慶應義塾大学の設楽と申します。本日は「都市計画という分野におけるコラボレーション：ゴンダール市における実践的なかかわり」というテーマで発表させていただきます。

私は2003年の春より本格的に、エチオピアのゴンダール市に長期滞在するようになり、ゴンダールの都市計画マスタープランの改訂事業にかかわってきました。

古都ゴンダール

はじめに、私がいま大学に在学しながらかかわっているゴンダールの紹介をさせていただきます。ゴンダールはエチオピア北部のアムハラ州の北部に位置し、17世紀ゴンダール王朝の首都として栄えました。その当時の王宮は、現在ユネスコの世界文化遺産に登録されています。また、ゴンダールから車で数時間ほど北上したところにはセミエン国立公園という世界自然遺産も存在します。ゴンダールは、そのほとんどはユーカリの木なのですが、緑に囲まれた歴史都市といった趣の町です（写真1）。

ゴンダールはまた、1936年から5年間、イタリア軍がエチオピアに侵攻した際に重要拠点として

開発され、その当時イタリア軍により建設された数多くのイタリア植民地建築が現在でも存在しています。調査によるとその数は400軒近くあり、公共施設、娯楽施設、商業施設、住宅といった多種多様な建築が残っています。また、イタリア軍は都市計画を実施しましたので、道路や生活に必要なライフライン、その他には起伏が激しいゴンダールの町ならではの、石の階段も造っています。

エチオピア北部から南部にかけて、写真2のような円形型の住居が数多く見られるのですが、ゴンダールにおいては、その工法を建築学的にみると、壁面は石を積み上げた組積工法でつくられています。例えばエチオピアの北部でもラリベラやアクスム、また南部の町でも円形をして円錐の屋根が架かる同じような様式の建築が多く見られます。しかし、ゴンダールのものは、それらと比較すると建築の規模がやや大きく、内部にしっかりとした4本の柱が存在することなどから、この地域特有の建築様式と考えられます。

ゴンダール市の都市計画

つぎにプロジェクトの紹介をさせていただきます

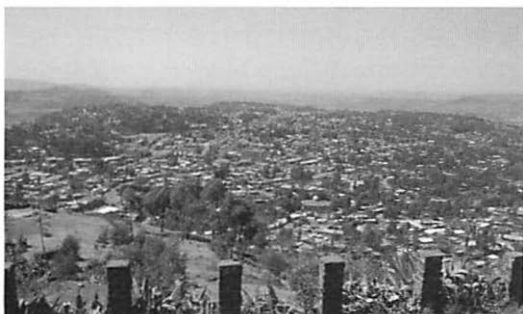


写真1 ゴンダールの町



写真2 円形型の住居



写真3 ゴンダール市役所



写真4 オフィスの様子

す。私が現地に行って、実際に何をしているのかというと、慶應義塾大学・ゴンダール市・アムハラ州・アジスアベバ大学という四つの組織が共同で、ゴンダールの都市計画マスタープランの改訂事業を2001年からスタートしています。その多くは本日の発表では省略しますが、ゴンダールがいまどうい問題を抱えているかといいますと、まずエチオピア全域で共通する問題のひとつですが、急激な人口増加があります。そのため町の土地利用を取り上げてみても、将来、どこの土地をどのように活用していくか、宅地なのかそれとも商業地として整備するのか、それとも工業地として使っていくのか、そのような土地利用計画が大きな問題となっています。

また、交通に関しては、現在自家用車の数はそんなに多くないですし、人々の移動はバスやタクシー、馬車(カ)リといったものですが、今後10年で急速な自家用車、商用車の普及が予測されます。そのための交通計画や道路計画も、今からしっかりと取り組まなくてはなりません。

重要なのは今後10~20年先に、ゴンダールの町がどう変わっていくかを考えながら、この町はいったいどうなるべきか、というゴンダールの未来像をつくる。こういうことを現在おこなっています。

ゴンダール市役所ではたらく

では、私が実際働いているゴンダール市役所の様子をお見せします。写真3の建物はイタリア軍が65年ほど前に建設したものを市役所として使っています。写真4が私のオフィスの様子ですが、

この部屋の3~4人のエチオピア人とともに都市計画の仕事をすすめています。

2001年にこのプロジェクトがスタートしてからは、都市計画に必要なデータを調査・収集することは、さまざまな分野のエチオピア人が集まって、共同でおこなってきたのですが、それを基に計画をする際に今日の都市計画事業においては、コンピューター化する作業が不可欠となってきます。

私の分担としては、市役所職員へのコンピューターの指導が最初の仕事でした。市役所にはコンピューターを使える職員がかなりいたのですが、建築関係のソフトウェアを使える人がいなかったため、その教育からスタートしました。つぎに、そのソフトウェアを使って手書きではなくてコンピューター化された電子地図の作成。これはなぜ必要かということ、大勢の方が参加しているときに同じデータをみなでシェアする、これは手書きですとなかなかうまくいかないのですが、コンピューターを使うとまったく同じデータをシェアして、日本でもアジスアベバでも同時に計画を進めていくことができます。

また、電子地図を含めたデータの管理と更新、歴史的建造物の調査、これはさきほど紹介したゴンダールの町の特徴のひとつとしての調査です。あとは各個人・組織間のスケジュール管理とワークショップのコーディネートなどです。

電子地図の一部(図1)は土地利用計画をあらわしたものです。現在のゴンダールの領域がわかります。地図の下の方に空港があり、その北の方が市街地となっています。ゴンダールは南北に15~16キロ、東西に3~4キロというかなり細長い

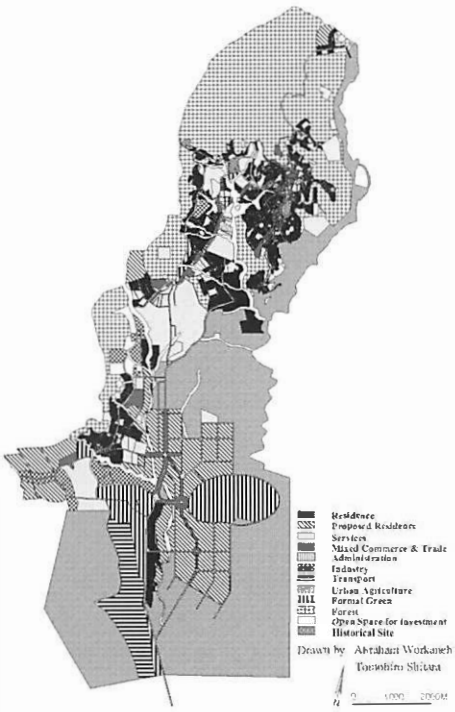


図 1 電子地図：ゴンダールの土地利用計画

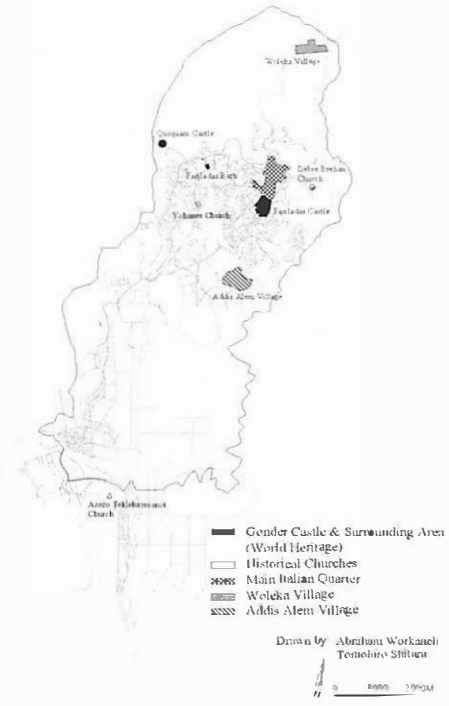


図 2 電子地図：ゴンダールの歴史的建造物の分布

形状をしていますが、これは都市計画的にみても特殊な事例です。この細長い町を今後どういうふうにするのか。行政的な機能をどこに置き、産業をどう捉え、新しい道路はどこに必要なか、等々今後どのように発展させていくべきか。こういったことを議論しているのです。

図 2 はもうひとつの例で、ゴンダールの歴史的建造物の分布をあらわしています。歴史的建造物を悉皆的に調査し、地図上へのマッピングをおおしてその分布をあきらかにします。また、歴史的な文献やヒアリングから、この町がどのように形成されてきたのかといった分析も始めています。

そして、これまで 2001 年から現在まで 4 回のワークショップを定期的に開催し、このプロジェクトに関係しているエチオピア人と日本人がゴンダールに集まり、それまで各個人・組織がおこなってきた成果の発表、ディスカッション、意見交換、そしてつぎのワークショップに向けての役割分担などを決定します。写真 5 は 3 週間ほどまえに開催されたワークショップの様子です。

地域とのかかわりからという観点で、これまでの共同作業での問題点に関して、ひとつのエピソ

ードを紹介します。エチオピアでは都市計画を教えている大学は二つしか存在せず、また学生も 10～20 人規模でしかありません。こういう人たちのなかには、もちろん海外に出ていく人もいますし、国内とくに首都のアジスアベバで活躍している人もいますが、とにかくエチオピアで都市計画をすすめる場合には人材不足ということが、大きな問題です。専門家の不足は、他の分野でも指摘され



写真 5 ワークショップの様子

ますが、とりわけ都市計画の分野では深刻なのです。

また、人材の流出も同じくらい深刻です。じつはエチオピアにおいて土木や建築、都市計画といった分野は、この2～3年で仕事の数が急激に増えてきているのです。市役所のようなお役所の職場環境は、決していいとはいえ、首都の民間企業などに比べると年々差が開いています。とくに収入の面では、場合によっては3倍近く月給に差がでています。結局、ゴンダール市役所からも、このプロジェクトがスタートしてから経験を積んだ3名の職員がアジスアベバの民間企業などに流れていきました。これを止める手段は正直いって現状ではなかなかありません。

プロジェクトをすすめていく際に感じた問題として、行政組織やアジスアベバ大学のような学術機関と仕事をすうえで、各個人・組織が受けもった仕事の責任を明確にし、そのなかでの意思決定のやり方もしっかり方法を定めていく必要があることが挙げられます。

まとめ

最後に、ゴンダールでの共同作業から得た発見について、もうひとつエピソードを紹介します。

人材が流出したあとに、ゴンダール市役所では

専門学校や大学を卒業したばかりの経験の浅い、若い職員を採用しました。この1年近くの間、私は彼らとともに一緒に考えて行動に移す、また彼らをスキルアップさせていくという経験をしました。

たとえば、いくらコンピューターの知識があってもひとつのソフトウェアしか使えないという職員ばかりでしたので、そこにもうひとつちがうソフトウェアの使い方を教えていきました。その二つが使えることで、かなり応用的に幅の広い仕事ができようになるようになりました。この経験はそれ以外の作業にも同じことがいえて、いままで考えているだけで実行できなかったことが、複数の技術を融合させることで可能になる。このようなことが、私がゴンダール市役所で勤務したなかでの大きな発見となりました。

ゴンダールでの共同作業から現場でなにかすることの意味とはなんなのか。1年という短い期間だけエチオピア人とともに働いてきた私としては、現場でなにかすることの意味は、まだ明確には見えてきていません。ともに考え、学び、実行することのなかから見えてくるのかもしれませんが、これに関しては後ほどのディスカッションでいろいろと意見を伺えたらと思っています。以上です。ご静聴ありがとうございました。

(したら・ともひろ／慶応大学)